『西南アジア研究』No. 24, 1985

「スルターン・ジェムの時代」のオスマン朝とヨーロッパ

新　谷　英　治

はじめに

1453年のコンスタンティノープル陥落に象徴されるオスマン朝の勢力はその後Mehmet 2世（在位1451—1481）の治世を通じてますます伸長していった。1459年Belgradeを除く全セルビアを併合し，61年にはアナドル（アナトリア）の黒海岸からヨーロッパ人を追い，62年にはジェノヴァからLesbos島を奪う。またボスニアを併合した。67年にはアルバニアも併合され，75年には北方のクリミア・ハーン国を宗主権下に置く。63年から続いていたヴェニスとの戦いは79年にひとまず終結するが，ヴェニスはこの戦いで重要拠点Negroponteを失い，アルバニア，モレア（ペロポンネソス）に残った僅かの商業基地も大きな圧迫を被っていた。そして1480年オスマン朝は東地中海制覇の障害となるロードス島の聖ヨハネ騎士修道会[1]を攻撃する。この攻略には失敗したものの，

1）聖ヨハネ（ロードス島，マルタ島）騎士修道会は1291年マムルーク朝によってシリアを追われ，1307年ロードス島に本拠を据えた。以来十字軍勢力の生き残りとしてヨーロッパのレヴァントにおける利益の擁護・拡大を自らの任としていた。僅かの島々とアナドルに少々の陸地（Bodrum-旧Halicarnassus-の近辺）を持っていただけとはいえ，黒海・エーゲ海から地中海への航路を押さえることになったため，オスマン朝にとっても侮れない存在であった。1453年のコンスタンティノープルの陥落により東地中海に本拠を持つ唯一のキリスト教徒勢力となり，ロードス島はムスリム（イスラム教徒）に対する最前線基地の性格を持った。1480年オスマン朝の大規模な包囲攻撃を受けたが，辛うじて撥ね返した。当時の総長はPierre d'Aubusson（在位1476-1503）。

E. Rossiによれば修道会は西ヨーロッパ各地に多くの修道会領（騎士領（Commandery））を持ち，それらを1462年の時点で地域毎に8のlangue（管区。Province, Auvergne, France, Italy, AragonとNavarre, CastileとPortugal, England, Germany）に分けて統括していた。原則的に各管区長（Prior）は軍務長官，病院長などの本部役職を兼務する。総長は修道院総会で選ばれ終身。各管区長を含む修道会参事会の助言によって行動する（iii-12 p. 318）。なお橋口倫介『騎士団』，近藤出版　1971，pp. 83—84参照。

同じ頃イタリア南部の Otranto に軍を上陸させており，総じてこの時期のオスマン朝の拡大は目覚ましいものであった。ヨーロッパはただひたすらオスマン朝の伸長を防がんとするのみであり，オスマン朝の勢いの前に，「反撃」など想像も出来なかった時代であった。

ところが次の Bayezit 2 世（在位1481—1512）の治世となった時，兄バヤズィットとの抗争に敗れた王子スルターン・ジェム（Sultan Cem，1459—1495）がヨーロッパにその身を置くことによって，オスマン朝とヨーロッパの間にそれまでとは性格の異なる一時期が現れるように見受けられる。本稿は，この特異な時期を「スルターン・ジェムの時代」と名付け，その成立と展開の過程を具体的に検討することによって，オスマン朝とヨーロッパの関係の歴史においてこの時期が有した意味を考察することを目的とする。従って従来の研究の主たる関心の対象であったスルターン・ジェムの人間性，あるいは彼のたどった運命それ自体の考察については本稿の直接の課題としない。

研究史について簡単に触れておこう。（以下括弧内の数字は別掲の参考文献一覧における番号を示す。）S. N. Fisher はバヤズィット 2 世の時代のオスマン朝とヨーロッパの関係を概括的に扱っている（ii- 3 ）。ジェムの問題にも言及しているが，最も根本的な史料である I. Bosio の『聖ヨハネ騎士修道会史』を直接利用しておらず，史料に基づく実証性に不満が残る。また L. Thuasne の研究（ii- 1 ）は19世紀末当時知られた史料に基づいてジェム及びジェムを巡るオスマン朝とヨーロッパの動きを述べた労作である。しかしあくまで主眼はジェムの生涯自体を描くことにあり，ジェムがヨーロッパに身を置いた時代の持つ意味をどう捉えるかといった観点から見ると，事実を述べながらも時代を描いていない憾みがある。トルコ人研究者の手になるもの（ii- 2 ，5，6，9など）は殆ど Thuasne の研究の焼き直しと言ってよいものが多く，新しい知見に乏しい。İ. H. Ertaylan の著作（ii- 2 ）は文書集—やや社撰で使用に注意を要するが—として多少の価値はあろう。その他ジェムに関して幾つかの論文がある。主なものを参考文献一覧 iii に挙げた。（なお S. Eyice の論文（iii-10）にはジェムに関する文献がまとめられており，参照に便利である。）

これらいずれの研究も，ジェムがヨーロッパに身を置いた時期を一つの時代として捉えてその成立，展開を検討することは行っていない。またオスマン朝とヨーロッパの関係史における意味付けも試みてはいない。本稿は以下の最も根本的な 2 史料に主としてよりながらこの課題に取り組もうとするものである。両史料とも我が国では殆ど知られていないものである。

第1は『ジェム伝』(i-1)である。著者はジェムの従者 Haydar Bey とされ(校訂者前文参照),ヒジュラ暦920年(西暦1514/15年)に成立した。ジェムに関する最も根本的なオスマン語史料である。

第2は『聖ヨハネ騎士修道会史』(i-3)である。Iacomo Bosio が聖ヨハネ騎士修道会所蔵の文書類に拠って創設から1524年までのこの修道会の歴史をイタリア語で叙述したもので,成立は1594年である。2部に分かれ,Parte Seconda は1291年の記事から始まる。修道会とオスマン朝の関係のみならずオスマン朝とヨーロッパの関係に関しても多くの記述を含む極めて重要な史料である。以下引用に際しては『修道会史』と略す。

I　スルターン・ジェム

我々はまず,1481年の出来事から始めてジェムの後半生を概観しておかねばならない。以下概ね『ジェム伝』による。

1. ジェムとバヤズィットの争い

1481年5月3日メフメット2世は,アナドル西北部の Tekirçayırı (現 Hünkarçayırı)で遠征の準備の途中急逝する。スルターン位継承者となりうるのはバヤズィット(Kastamonu 地方長官,在 Amasya),その弟ジェム(Karaman 地方長官,在 Konya)であった。当時オスマン朝にスルターン位継承について明確な規定あるいは慣習があったか,あったとすればどんな内容かという問題は依然解明されていない。規定,慣習の有無はともかく,事実として両者は実力でスルターン位を争わねばならなくなった。

両者は父の死の報を受けるとそれぞれ首都イスタンブルを目指して行動を開始した。逸早く宮廷の有力者たちを多く味方につけることに成功したバヤズィットが先に都に入り,1481年5月21日8代目スルターン,バヤズィット2世として即位した。一方ジェムは5月末頃旧都 Bursa に拠って自ら真のスルターンと主張し,兵力,資金の調達に努める。しかしブルサ住民の支持が一致したものとならず,このジェムのブルサ政権は不安定であった。

バヤズィット2世はジェムのブルサ政権を恐れ,これを撃破すべく自ら兵を率いてウスキュダルへと渡った。ジェムは戦えば不利と見て領土分割(ルメリ(ルーメリア)をバヤズィットに,アナドルをジェムに)の妥協案を示す。しかしバヤズィット2世はこれを一蹴し,ジェムは決戦を余儀なくされた。1481年6月20日ブルサの東方約70kmの Yenişehir で両軍相見え,ジェムは兵力の差,部下の裏切りが主因となって決定的敗北を蒙り,カラマン地方へ逃れた。

ジェムは6月25日にコンヤに着いた。追っ手を逃れるために母，妻子，若干の従者たちと共に出発し，Tarsus 地方に出た。そこから南はマムルーク朝の勢力範囲であった。シリア地方を南下し，9月26日マムルーク朝の首都カイロに入り，時のスルターン，Qā'it Bāy（在位1468—1496）に迎えられた。カーイト・バーイの保護の下でしばしの安息を見出し，同年12月から聖地巡礼に出て翌1482年3月カイロに戻った。

この頃カラマン君侯国の残党 Kasım Bey など，アナドル方面からの呼び掛けがあった。ジェムは再度バヤズィットに挑戦することを決意し，カーイト・バーイの援助を受けて手勢を整え，1482年3月下旬アナドルに向けてカイロを発った。5月中旬にはアナドルに入り，コンヤを奪おうとするが失敗し，アンカラ方面に転ずるもバヤズィットの軍の前に殆ど戦うことも出来ないままにジェムの軍は崩れ去った。再度敗れたジェムはタルスス山脈を越え，6月17日 İçel 地方に出た。僅か三十数名の者が付き従うのみであった。

2．ジェムと聖ヨハネ騎士修道会

進退谷まったジェムはロードス島の聖ヨハネ騎士修道会（以下修道会とのみ記す）に援助を求めた。彼等の助力を得てルメリに渡り，改めてバヤズィットに挑む考えであったとされる。修道会から援助の約束と安全の保証を得たジェムは従者の反対を押し切って修道会の船に乗り込み，7月30日，僅か2年前に父の軍によって激しい攻撃を受けたロードスの港に降り立った。修道会総長 Pierre d'Aubusson は幸運にも敵国の王位請求者を掌中にしたのである。

ジェムがロードスに滞在したのは約1ヶ月であった。修道会はこの間ジェムを丁重にもてなしながらも，ジェムの対バヤズィット行動のための支援はせず，逆にジェムの利用方法，さしあたって当面いかにバヤズィット2世の怒りが直接修道会に及ぶのを避けつつジェムを捕らえておくかを検討していた。

支援の約束は反古となり，ジェムはその意に反して西ヨーロッパに送られることになった。修道会は今日のフランス東南部にあたる Auvergne 管区内の修道会領でジェムを監視することにしたのである。1482年9月1日，ジェムは従者たちと共に修道会の船でフランスに向けて送り出され，以後自らの意志で行動することが不可能となった。

3．ヨーロッパのジェム

（1）修道会監視の下で

1482年10月半ばジェム一行はニース（当時サヴォア公領内）に着き，約4ヶ月間ここに留どまった。1483年2月7日ニースを発ち，トリノ方面に向かって Piemonte 地方を

北上する。トリノの辺りから西方に向きを変え，Susa を経てアルプスを越え，Chambéry に入った。さらに進んで，1483年2月21日修道会領である Les Échelles に到着した（iii-9 pp. 124—125, 130—132）。ここには4ヶ月滞在した（1483年2月下旬—6月下旬）。ジェムはここでサヴォア公 Charles 1世（フランス王 Louis 11世の甥）の面会を受けたが，彼がジェム奪取を図ったため修道会は南方の Le Pouët にジェム一行を移し，4ヶ月程留どめた（1483年6月下旬—10月頃）。この間8月下旬にルイ11世が死去し，混乱が及ぶのを恐れた修道会はジェムの従者約30名をジェムから離してロードス島に送り返し[2]，数人だけジェムの許に残した。

1483年10月末ないし11月初めの頃 Rochechinard に移り，11月末から12月にかけての頃 Sassenage に移動した。1484年1月頃 Vienne で Rhône 川を渡り，西に山越えをして Clermont(-Ferrand) に着いた。当時この一帯はブルボン公領であった。Clermont を西に向かって抜けて，修道会のオーヴェルニュ管区の中心 Bourganeuf に入った。20日程滞在した。1484年2月ないし3月頃 le Monteil-au-Vicomte の城塞に移り，2ヶ月程でさらに Mortrolles へ移動する[3]。ジェムを奪おうとする動きがあったらしく，危険を避けるためにここを2ヶ月程で引き払い，Boislamy の城塞へ転じた。1484年6月ないし7月頃と思われる。幹線道路から外れた山深い地点にあり，谷を臨む自然の要害であった。ジェムは着いて間も無く部下をブルボン公の許に送って脱走の準備にかからせたが，目的を達しえないままに約2年間ここで日を過ごす。その他の具体的な生活は分からない。

1486年7月頃ジェムは再度ブルガヌフに移された[4]。修道会がジェム監視と外部からの隔離のために建てた7階建ての塔に入れられた。ジェムと従者たちは到着後ほどなく再度脱出を試みたが，事前に発覚して失敗し，厳しい監視の下2年余りを過ごす。

2）1486年頃 Sinan Bey, Ayas Bey が再びジェムの許へ戻され（『ジェム伝』p. 16），1487年には『ジェム伝』の著者 Haydar Bey を含む二者が戻されたと考えられる（iii-9 pp. 129—130）。

3）このブルガヌフ近辺がピエール・ドビュソンの家系の根拠地である。彼自身ブルガヌフあるいはル・モンティユ・オ・ヴィコントの生まれであり，ル・モンティユ・オ・ヴィコント，モルトロル，後出の Boislamy は彼の血縁の修道会士の領であった。

4）ピエール・ドビュソンの甥 Guy de Blanchefort がオーヴェルニュ管区長として1485年からここに駐在していた。

（2）ローマ教皇の許で――そして死

1488年11月10日ジェムはブルガヌフの塔を出た。ローマ教皇 Innocentius 8世（在位1484―1492）に引き渡されることになったのである。修道会士らに伴われて出発し，11月17日リヨンに着く。12月5日船に乗り込んでローヌ川を南下し，途中陸路も使いながらマルセイユを経てトゥーロンに到着した。1489年2月12日トゥーロンからジェム主従と修道会士たちを乗せた船がイタリアに向かって発ち，3月上旬 Civita Vecchia に入港した。そして3月14日，ジェムはローマに入った。

ジェムは修道会の7年近くに亙る拘束から解放されたが，今度は教皇の監視下に置かれた。ただジェム主従の生活は，監視を受けながらもある程度の自由を与えられていたと思われる。1492年 Alexander 6世（在位1492―1503）の時代に入っても彼等の状況は概ね変わりがなかった。

1494年フランス王 Charles 8世がイタリア遠征に出た時事態は一変する。シャルル8世は，1494年末にローマに入城し，アレクサンデル6世を威圧してジェムの引き渡しを求めた。1495年1月28日教皇からジェムを奪い取り，ナポリ王国への行軍に同行させた。この行軍の途中ジェムは体に変調を来し，症状は急速に悪化した。ついに2月25日ナポリで35歳の生涯を閉じたのであった。

1482年から1495年の間、オスマン朝のスルターン位請求者ジェムは修道会，ローマ教皇，そしてフランス王の許で拘留されていた。そしてこの時期オスマン朝は西方に対する軍事行動を制約されていたように思われる。北方の黒海西岸部への軍事行動は試みているものの，西方へは殆ど有効な攻撃をしかけておらず，特に海上では西方に向けて艦隊を全く出撃させていない。1495年以降再びオスマン朝の西方への攻撃は活発化し，1499年には東地中海を舞台にヴェニスと，教皇も巻き込んだ大規模な戦争に入ったのである[5]。これらのことから我々は，1482年から1495年の時期のオスマン朝とヨーロッパの関係がそれまでの時代と異なった性格を持っているのではないかという見通しを得る。

II 「スルターン・ジェムの時代」

この見通しを，1482年，83年のオスマン朝と修道会の関係，及びヨーロッパの状況を具体的に検討することによって検証して行こう。

5） 1503年オスマン朝勝利の形で和平。

1．オスマン朝と修道会

1482年9月2日修道会の使者がオスマン朝の宮廷に向かってロードス島を発った。和平交渉が目的であった。この交渉の働きかけがいつ，どちら側からなされたかについてオスマン朝側史料は殆ど何も語っていない。Bosio に拠れば，ジェムがロードス島に渡る以前にオスマン朝側から働きかけを始めており，バヤズィット2世は修道会の捕虜の解放という譲歩を示し，8月27日修道会は和平交渉開始を受け入れたという（『修道会史』pp. 370—376）。Bosio の記述以外手掛かりの無い現状ではひとまずその通りに受け入れておくほかあるまい。

それでは交渉の結果結ばれた条約はいかなる内容であったか。これについては J. v. Hammer-Purgstall も簡単に紹介している[6]が，Bosio の記述が最も詳しくまたより正確であろうと思われるのでそちらによって以下に内容を示す。

第1条　武器の放棄。双方とも真実で純粋かつ完全な和平を誠実に守ること。

第2条　スルターン（i Gran Signore）とそのパシャ，サンジャック・ベイ，スバシ，クル（Schiavi），臣下，臣民は陸上，海上を問わず，ロードスの町と島，さらに総長と修道会（la Religione）の持つ島，城，領地に対して攻撃しあるいは打撃を加えてはならない。

第3条　逆に総長，騎士，修道士，市民（Cittadini），臣下，臣民は陸上，海上を問わず，トルコ人（i Turchi）に対して，またスルターンに属する領域，領地に対して攻撃しあるいは打撃，迷惑（molestia），妨害を加えてはならない。

第4条　スルターン及び修道会双方の商人，臣下，臣民はスルターン，総長，修道会に属するいかなる地方あるいは地域においても東西に亙るすべての町，領地，城，島へ商品，財産を携えて安全に赴き，留まり，商いをし，通行し，売り，買い，帰り，そして望むならば再び妨げなく赴くことが出来る。

第5条　商人はその土地土地の慣習に従って取引税（i Commercij），関税を支払わねばならない。

第6条　上述の支配者たち［スルターンと総長及び修道会］の商人，部下，臣下，臣民の間で何がしか争い事が生じた時，そのような争い事は彼等の所在地の慣習によって裁かれる。

6）Joseph v. Hammer-Purgstall, *Geschichte des Osmanischen Reiches*, 10 vols., Pest 1827—1835, Vol. 2, p. 265。

第7条　総長，修道会及びその商人，臣下，臣民は彼等の貨幣で，スルターンに属するいかなる地方においても，小麦，大麦，家畜その他の食糧を買い付けることが出来，かつそれらの地方から安全に搬出出来る。

第8条　修道会の船舶がスルターンの艦隊の姿を認めた時には敬礼（salutare）をしなければならない。トルコ人が修道会のガレー船の姿を認めた時も同様である。

第9条　［元の］主人と同じ信仰に留どまっている逃亡奴隷は無償で返還されねばならない。異なる信仰にある者は金貨20スクード（Venti scudi d'oro）で自由の身となる。

第10条　San Pietro 城[7]は，そこに身を守るために駆け込む者は誰でも受け入れ，保護できる。

第11条　この和平条約はバヤズィット2世の存命中有効とする。（『修道会史』pp. 378—379）[8]

当時修道会は経済力，軍事力の点で大変に苦しい状況にあった。僅か2年前にオスマン朝の大規模な包囲攻撃を受け，さらに前年1481年には四回に亙って地震が起こり，大きな打撃を受けたばかり（『修道会史』pp. 349—354）で，ロードス島内は疲弊していた。上の和平条約を結ぶにあたり総長が，

［和平が達成されれば］人々が天災から，そして先の戦争から一息入れることが出来，—中略— 必要な食糧を調達出来る。（『修道会史』p. 371）

と考えていたことからも十分窮状が知られる。一方オスマン朝はメフメット2世の相次ぐ遠征による財政的負担，バヤズィットとジェムの争いによる混乱はあったと思われるものの経済力，軍事力は修道会のそれらを凌いでいたことは疑いない。

このことを念頭に置いて上の条約を見ると，この条約が修道会側にとって極めて有利なことが分かる。当時の両者の経済的，軍事的実力を比べれば修道会が劣勢であったのであるから，元々有利な条項は勿論，対等な条項であっても実質的には修道会にとっては有利となる。第2条と第3条，第4条，第5条，第6条，第8条，第9条は対等であっても実質的に修道会に有利な条項である。第7条は食糧調達という修道会の死命を

7）修道会領のボドルムにある。

8）Bosio が条約をそのまま再録しているかどうか問題があるが，記述が極めて具体的であることからほぼ条約全体と考えてよいだろう。

制する事柄をオスマン朝が認めており，この条約の眼目と言ってよい。オスマン朝にとっては屈辱的ですらあった条項と思われる。第10条は一見対等な条項に見えるが，修道会所有のサン・ピエトロ城に駆け込む者とは，何等かの理由でオスマン朝の手を逃れようとするキリスト教徒以外には殆ど考えられないのであるから，これも修道会だけが恩恵を受ける条項と言って良い。こうして見るとこの条約は完全に修道会に有利なものである。そして Bosio はこの条約が，

> 修道会の使者がロードスから持参した［原案］と殆ど同じ内容であった。(『修道会史』p. 378)

と言っている。修道会はオスマン朝から大幅な譲歩を勝ち取り，交渉の勝利者となった。

ところでこの和平条約にはジェムへの言及は全くない。ジェムを巡っては，修道会の交渉担当者の帰路同行したオスマン朝の使者が交渉にあたり，1482年12月８日基本的合意が成ったと考えられる。合意の内容を Bosio は次のように伝えている。

> まず，スルターン及び彼の名においてその使者は，修道会の国庫宛としてヴェニス金貨35000枚[9]を毎年８月１日に前払いで[10]，確かに間違いなく総長と修道会にロードス島で手渡すと約束した。これはその弟ジェムの丁重な保護（honorevuole mantenimento）と扶養（sostenatione），監視（guardia）用［の金］である。［支払い対象期間が］去る８月１日に始まるものと合意された今年の分については，12月８日から数えて40日以内に同じくヴェニス金貨35000枚を上述の目的のために総長に手渡すものと約束された。さらにスルターンはその父がロードス島包囲攻撃の時にこの島と修道会に属する他の諸地方に多くの打撃 ―中略― を与えたことを考慮して，自発的に，総長個人宛に別に金貨10000枚をロードス島で毎年８月１日に前払いで手渡すと約束していた。最初の支払い［対象期間］は去る８月１日から始まるものとされた。逆に総長と修道会は，スルターンが不利益と不和を避けるために上述の事を完全に守るならば，彼等の力の及ぶ限り，ジェムがバヤズィットに戦いを挑むことなく静かにそして穏やかに彼等の力の下に留まるよう熱心に取り組み，

9）F.C.Lane によればヴェニスの ducato は1284年以後重量3.5ｇ，純度99.7％を保ったという。また ducato はジュノヴァ，フィレンツェの florin 金貨と同じ重量，純度であった（F.C.Lane, *Venice—A Maritime Republic,* Baltimore, London 1973, p. 148）。以下本稿では ducato, florin ともに金貨何枚とのみ記す。

10）当該年度終了以前に支払うの意。

あらゆる事をすると約束した。スルターンが上述の事を守らなければ，彼等は以前の通り自由に振舞うものとし，［しかし］互いの間の和平条約はこれによって妨げられることなく，それについてなされた誓約の通り，揺るぎなく確固として，破棄されずにあるものとした。(『修道会史』p. 380)

オスマン朝は修道会のジェム監視の約束に対して，1482年分に始まって以後毎年莫大な金額を修道会に持参しなければならなくなった。ここでもオスマン朝は修道会に大きな譲歩を強いられたのである。Bosio が

［バヤズィット2世は］ジェムが故国に帰還出来る自由を持つ限り自らの権力に安住出来ないという警戒心と不安のために，殆ど自らを総長と修道会に対する納税義務者（Tributario）とするを余儀なくされた。(『修道会史』p. 380)

と言うのはあながち誇張ではない。

ジェムを巡る交渉はこの合意を以て終わったのではなかった。むしろこれは交渉の出発点とも言うべきものであって[11]，最終合意までにはさらに数ヶ月を要したと思われる。その間をたどるために我々に与えられている史料は決して多くないが，2通の貴重な文書の存在が知られているので，それらを利用して考えて行こう。

第1の文書は J. Lefort が紹介しているトプカプ宮殿古文書館ギリシャ語文書第90番（T. S. A. Y no. 90）である（i-4 pp. 36—42)。これは1493年4月4日付の総長のバヤズィット2世宛の書簡である。次にその内容を示す。

……総長はスルターンからその使者 Hüseyn Bey を介して1通の書簡を受け取った。—中略— スルターンは弟ジェムに会うべく，そして既に結ばれた取り決めに従ってすべてが実行されていることを確認すべく使者をフランスに（εἰς τὴν Φράντζα）送ることを望んでいるとの由。ジェムの扶養と保護のために，使者はヴェニス金貨40000枚（μ' χηλη'ἄδες δουκατα βευέτικα）を持参せねばならない。また毎年12月1日，同じ目的のために同じ額を送られたい。—中略— 総長はスルターンの意向に沿って，誠実な友として，その使者に首尾よく全く安全にフランスへ往復し，その使命を果たす術を提供しよう。—中略— 使者フサイン・ベイは今や金を運ぶために出発する。彼がロードス島に戻り次第，彼は参事会の騎士と共にフランスに到着することになろう。1483年4月4日。……

---

11) Lefort は，バヤズイット2世が，自らの使者が戻った後金貨45000枚に不満を示したらしいと指摘する（i-4 pp. 37—38)。

第2の文書はİ. H. Ertaylanが紹介し，İ. H. Uzunçarşılıが改めて取り上げているトプカプ宮殿古文書館文書第3286番（T. S. A no. 3286）で，1483年4月9日付のフサイン・ベイのバヤズィット2世宛の書簡である（ii-2 pp. 184—185，iii-5 p. 464）。次のようにある。

……我々はMughla[12]に来て持参品をすべてムグラのカーディーに預けた後，ロードス島に渡った。総長と会見し，帝王のご指示のすべてを述べた。彼等は帝王のご希望通り承諾し，［交渉事項は］決着し，決定された。まず金貨40000枚（qïrq biñ filūri[13]）［しか支払わないこと］を承諾し，彼等は高貴なる御門へ回答をしたためた。次に我々をフランスへ案内することを保証した。—中略— 我々は今述べたことに沿った合意文書を受け取り，それはİlyas Beyと共に［御前に］送られた。—中略— 我々は［島を］出た。ムグラのカーディーは先の金貨を持ってきて我々に渡した。—中略— 我々は全額を受け取って［修道会へ］引き渡しに行った。—中略— 888年Rabī‘ al-awwa 1月1日［西暦1483年4月9日］。……

第1の文書が第2の文書に言う「合意文書」のことだと考えてまず間違いなかろうが断定は出来ない。その当否はともかく，第1の文書からは1483年4月の時点で，〈1〉バヤズィット2世がフサイン・ベイをジェムとの面会を目的としてフランスに送ることを望み，修道会はそれを受け入れる用意があること，〈2〉金貨は毎年12月1日に40000枚支払われることになったことが知られる。第2の文書はこの前後の経緯をバヤズィット2世に報告したもので，上の〈1〉，〈2〉を十分に裏付けるものである[14]。

4月9日以降もこのようなジェムを巡る取引の交渉があったかどうか筆者の見ることの出来た史料では確かめ得ない。しかし第2の文書の記述から見て，これが交渉の決着を示すものと考えてよいのではないか[15]。

以上により，ジェムを巡る取引は1483年4月上旬には決着し，修道会によるジェム監視の見返りにオスマン朝は毎年金貨40000枚を支払うことになり，併せて修道会はオス

12）アナドルの，ロードス島対岸の地方。

13）40000 florin。注10)参照。

14）フサイン・ベイのフランス行の概略については i-4 pp. 38—39参照。なおバヤズィット2世の密使Barak Reisについては iii-7，9を，同じくİsmailについては i-4 pp. 61—66及び iii-5 pp. 458—463参照。

15）フサイン・ベイがこれから支払う金貨は1482年分の40000枚と考えるのが妥当。なお次注参照。

マン朝の使者をジェムとの面会のためにフランスに送ることになったと言えよう[16]。

こうしてオスマン朝は，修道会と1482年12月初めに和平条約を結び，1483年4月上旬には，修道会によるジェム監視の見返りに修道会に対する「納税義務者」となることを受け入れたのであった。そしてこのようなオスマン朝と修道会の関係はジェムが修道会からローマ教皇に引き渡されるためにブルガヌフを発った1488年まで変わりなく続くのである[17]。

2．「スルターン・ジェムの時代」

修道会の真意は，オスマン朝との和平を維持しつつジェム監視の対価を受け取ることにあったのではない。それは『修道会史』にある次の言葉に端的に表れている。Bosioが，教皇，ナポリ王Ferdinando（Ferante，在位1458—1494）その他ヨーロッパ諸君主宛の総長の書簡の内容を述べたくだりである[18]。

> ……総長は，教皇，ナポリ王フェルディナンドその他のキリスト教徒諸君主にジェムがフランスに赴くことと彼等がそう勧めた理由を知らせる書簡を送った。彼等全員に，オスマン家（la Casa Ottomana）がキリスト教徒に敵対して占領したすべてのものを奪い返す，神が差し延べてくれたこの最上の機会を生かすように説得した。—中略— ジェムのロードス島到着とその後の事態の進行については別に上述の君主たちに通知済みだったので，今回はただジェムのフランス行きについてのみ通知した。（『修道会史』p. 375）

修道会がフランスでジェムを監視することによりオスマン朝が外交的に譲歩しているこの時期こそヨーロッパのオスマン朝攻撃の好機であると訴えている。これは対オスマン朝十字軍への諸君主糾合の訴えとも言えよう。また後半部からは「ジェムのロードス島

16） Lefortはマルタ島所在の文書のうちバヤズィット2世とピエール・ドビュソンの交渉に関する10通（[P.S.Paoli]，*Codice diplomatico del sacro militare ordine gerosolimitano, oggi di Malta*, II, Lucques 1734に収録，F.Miklosich，I.Müller，*Acta et diplomata graeca medii aevi*, III, Vienne 1865に再録）を日付順に内容の概略と共に紹介している。そのうちの最後，1483年4月14日付の書簡は，ピエール・ドビュソンがバヤズィット2世に金貨40000枚を受け取った旨知らせるものという（i-4 p. 7，note 27）。これも筆者の推定を支えてくれるかも知れない。

17） Lefort紹介のギリシャ語文書T.S.A.Y no. 56に拠ればオスマン朝は1488年まで7回分の金貨（合計280000枚）を支払っている（i-4 p p. 98—103）。この事実からもこの間修道会とオスマン朝の外交上の力関係に大きな変化が無かったことが分かる。

18） ジェムをフランスへ送った船を利用してヨーロッパに発送された（『修道会史』p. 375）。

到着とその後の事態の進行」が既にヨーロッパに通知されていたことが知られる。いつ，どの程度の詳細さで通知されたかは我々の持つ材料では判断出来ないが，ジェムが修道会の下に身を置いて間もなく，ジェムの存在がヨーロッパに知られていたのである。

この書簡に対する反応がいかなるものであったか，さらに Bosio の記述によって見ておこう。修道会への返書の内容が具体的に述べられているのはナポリ王とハンガリー王 Mathias Corvinus のものである。ナポリ王はその1483年 9 月27日付の返書で，教皇，ヴェニスと交戦中のためオスマン朝に軍を振り向ける余裕のない旨伝えており，併せて，

> ハンガリー王はこのこと［修道会のオスマン朝攻撃への訴え］に大変意欲的である（inchinatissimo）。（『修道会史』p. 383）

と知らせている。そのハンガリー王は1483年11月20日付で修道会に

> 他のキリスト教徒君主がこの事業に着手するならば彼自身もバヤズィット攻撃のため彼の陸軍（il suo terrestre Essercito）を率いてゆく用意があり，またそれを望んでいると書き送ってきた。（『修道会史』p. 383）

のであった。

他のキリスト教徒諸君主はいかなる回答をしたか。Bosio は先のナポリ王の返書の紹介に続けて

> 総長はイタリアの他のキリスト教徒諸君主すべて，そして［イタリア以外の］他のキリスト教徒諸王，諸君主の大部分から大同小異の返事を受け取った。彼等は皆戦争，内輪の支障事を理由に弁明した。（『修道会史』p. 383）

と述べている。ただ一人意欲を示したハンガリー王も結局は

> 何も行動を取らなかった（『修道会史』p. 383）

のである。このように 9 月 1 日にロードスから発せられた書簡の訴えるところに応えてオスマン朝への行動に出た者は誰もいなかったのであった。

しかし修道会によるジェムの監視がオスマン朝への攻撃の訴えと共にヨーロッパに通知されたことは，オスマン朝との関係から見れば，ジェムが修道会も含めたヨーロッパ全体の中に身を置いたことになると言ってよい。たとえその時点でヨーロッパによる対オスマン朝行動に結びつかなかったにせよ，ジェムが修道会監視下に入ったことがオスマン朝とヨーロッパの関係という，より大きな枠組みの問題を生じさせたのである。そしてオスマン朝のヨーロッパへの攻撃が，ジェムが修道会監視下に置かれた時，即ちヨーロッパ全体の中に置かれた1482年からジェムの没する1495年まで殆ど停止の状態にあったことを考え合わせれば，ジェムの存在によってオスマン朝とヨーロッパの間にそ

れまでと全く異なる特異な時期が現れたと言えよう。そこで我々はこの時期を「スルターン・ジェムの時代」と名付ける。この時代は何よりも，ヨーロッパが「オスマン家がキリスト教徒に敵対して占領したすべてのものを奪い返」せるかどうか，少なくともオスマン朝に「反撃」出来るかどうかその実力を問われた時代であると言えるのである。

III 「スルターン・ジェムの時代」とヨーロッパ

本章では「スルターン・ジェムの時代」の終わるまでを対象として，主として『修道会史』によりながら修道会を含めたヨーロッパ内部の状況を分析する。ヨーロッパがオスマン朝に対していかなる動きを示したかを検討し，この時代の持つ意味を考えていきたい。

「スルターン・ジェムの時代」は3期に区分される。ジェムが修道会の監視下にあった1488年まで，その後ローマ教皇の監視下にあった1495年1月まで，そしてフランス王に渡されナポリで没する同年2月までである。以下概ねこの区分に従ってそれぞれの時期について考えてみよう。

1．ジェムの修道会監視下の時期

1483年バヤズィット2世は艦隊の整備を行っていた[19]。Bosio に拠れば，西方世界全体（tutto l'Occidente）がこのバヤズィット2世の準備を恐れ，中でもシチリアを支配していたカスティリア王 Fernando（統一スペイン王。シチリア王としては在位1486—1516），ナポリ王，ハンガリー王から総長に次のように要請があったという。

> ……カスティリア王，ナポリ王，ハンガリー王は，彼等の国がスルターン（il Turco）に近いが故に，スルターンが彼等を攻めるために艦隊を送らずに彼等との同盟と友好を望むように[20]，総長の権威を仲立ちにして［スルターンに要請して］貰いたいと熱心に願った。そして各人はジェムを引き渡すよう非常にしつこく（con instanza grãdissima）求めていた。—中略— 彼等がジェムと共にあることにより，スルターンは恐れて敢えて彼等の国に行動を起こさないだろう［と考えていた。］……（『修道会史』p. 389）

19） 『修道会史』p. 387。修道会は，ヴェニスの求めに応じてその直接の交戦相手フェラーラを支援しているナポリ王を牽制するため1484年春に出撃するものと理解していたという（同）。

20） 原文は far volesse anco con essi confederationi, & amicita。 volesse の主語が総長である可能性もあるが前後の記述からスルターンと解した。

総長の回答は，

……ジェムの件について彼等の意に沿えないことを詫び，ジェムを自らの手の中に置こうと決心していること，これまでそう努力を続けてきた通りバヤズィットに対する同盟を作り上げる義務が自らにあること，またその同盟によって何等かの注目に値する、キリスト教世界の共通の利益（beneficio publico della Christianità）にかなう戦争が，ジェム［によってもたらされたところ］の好機と相俟って（con l'occasione del sopradetto Zizimi）為され得ることを望んでいると述べ，総長がジェムの身柄を拘束している限り，艦隊を以て彼等の国に危害を及ぼさないようスルターンを容易に牽制出来ると約束した。（『修道会史』pp. 389—390）

というものであった。艦隊派遣の中止をバヤズィット2世に求めることは出来るが，それもジェムあってのこと，引き渡しは断るというのである。

カスティリア王とナポリ王は従兄弟同士，ナポリ王はハンガリー王の義父にあたり，一見三者のオスマン朝に対する同盟関係が出来ているように見える。それならば三者のジェム引き渡し要求は対オスマン朝同盟を唱える総長の希望にかなうものであったとも考えられる。しかし上の Bosio の記述から読み取れるところでは，彼等のジェム引き渡し要求は，それぞれの領土がオスマン朝に近いため艦隊の矛先が自国領に向かないようにと考えたことが理由であった。彼等は謂わば守りの姿勢しか取れず，オスマン朝に対する積極的な意図を持っていたと言えない。総長がこの「同盟」に期待を掛け得なかったのは当然であろう。

オスマン朝に対する十字軍が組織されるとすれば中心になるべき存在として直ちに思い浮かぶのはローマ教皇であろう。ジェムが修道会の監視下に落ちた当時の教皇は Sixtus 4世（在位1471—1484）であった。修道会はオスマン朝との和平について彼に伺いをたて，ジェムに関しても詳しく報告している[21]。しかし彼はこの問題に関して目立った動きを見せないまま1484年に没する。かわって教皇の座に着いたのはインノケンティウス8世である。彼はジェムに大きな関心を示した。

1485年新教皇への服従表明にローマに着いた修道会の使節は教皇から次のような内容の言葉を聞く。

キリスト教世界の共通の利益のためにジェムの身柄はイタリアに移され，教皇に引

21）『修道会史』pp. 372，381—382など。オスマン朝から毎年受け取る金貨については知らせていない。

き渡され（fosse dato in potere del Pontifice Romano），修道会の直接警備の下で教皇領内の町あるいは城塞に滞在すべきものと考える。（『修道会史』p. 401）

教皇はジェムの直接警備を修道会側に委ねながら，その処遇は以後彼の判断に任せるよう求めたのである。修道会側はどう対応したか。以下は『修道会史』の，1485年7月1日に帰還した使節の復命をうけて総長と修道会が対応の検討に入ったくだりである。

総長は，時に及んでも戦争を行うには教皇一人の力では十分ではなく，ナポリ王でさえ十分でないと見ていた[22]。そしてもしキリスト教徒諸君主の強固な同盟が出来れば，それによって最も有意義な進展（progressi importantissimi）がもたらされようが，と考えていた。そしてその同盟が確立される以前にジェムをフランスから移してはならないと判断した。そのような行為はスルターンに警戒心と疑念を抱かせ，安心を得るための（per assicurarsi）大規模な［攻撃の］準備をさせ，修道会と締結している和平条約を破棄させ，さらに彼の艦隊でキリスト教世界に多大な打撃を与えさせるのみであると考えたのである。―中略―［総長は］教皇に，同盟を確立し戦争（Impressa）の準備を整える以前にジェムをイタリアに移すことは不都合（inconvenienti）を生じかねない旨具申することを決定した。（『修道会史』pp. 402―403）

文中の「戦争」とはオスマン朝に対するものであるのは文脈から明らかであろう。それ故修道会側が対オスマン朝戦争を念頭に置いて教皇の要求を検討していたことが知られる。従って教皇のジェム要求の理由が，先の教皇の言葉（『修道会史』p. 401）では「キリスト教世界の共通の利益のために」と漠然と表現されているが，その意味するところは教皇によるオスマン朝攻撃であったと分かる。しかし修道会の判断ではそれは教皇一人の力では不可能だった。それ故修道会はオスマン朝攻撃には何よりもキリスト教徒諸君主の強力な同盟が必要と考えている。教皇へのジェム引き渡し拒否は，修道会がこの時点のヨーロッパにおいてこの同盟は実現不可能と判断したことを示している。教皇には自らオスマン朝と戦う力もオスマン朝攻撃の同盟を組織する力も無かったのである。

ところがこのように一旦拒否した修道会が，1486年2月13日教皇へのジェム引き渡し

22） 修道会が教皇のジェム要求の件と同時にナポリ王の同趣旨の要求について検討していたため，修道会のナポリ王への評価も教皇への評価と前後して述べられたのである。ナポリ王も教皇と同じくオスマン朝攻撃を理由にジェムを求めたと思われるが，同盟の確立を大前提と考える修道会は教皇に対してと同様，これを拒否した。

に同意している。フランス王の同意が前提であったが[23]，1486年の4月のうちにはジェムがイタリアの教皇領に移されるものとされた（i-6 pp.263—269，ii-1 pp.138—140，『ジェム伝』p.16）。この合意には謎が多い。4月末までにジェムが渡されるとされながらそのための具体的な行動が教皇にも修道会にも見られず，さらに4月を過ぎてもジェムが依然フランスに留められていることについて互いに責任を云々した形跡がないのは何故か。そして何よりも，Bosio が『修道会史』の1486年の条でこの重要な件に全く言及していないのは何故か[24]。残念ながら我々はこれらの謎を解く十分な材料を与えられていない[25]。ただ言えるのは，この合意が成立していたのは確かであると思われるがフランス王の同意が得られぬ限り何の実効も及ぼさないものであったということである。ジェムは1488年11月まで依然修道会監視の下，ブルガヌフの塔に幽閉されていたのである。

1486年に本格化したオスマン朝とマムルーク朝の戦争[26]はマムルーク朝優位に進行していた。この状況をにらんでのことであろう，修道会総長は教皇に次のように訴えている。

> ジェムを掌中にしていることによって得ている好機を徒に時を過ごして逸してしまわずにかの暴虐者［バヤズィット2世］に対して一致して武器を取るよう，貴下の権威を以てキリスト教徒諸君主に勧告，促迫頂きますよう。（『修道会史』p.405）

総長は教皇による諸君主の糾合を訴えている。一向に統一的行動への動きを見せない西方の政情に対する総長の焦燥を読み取れる。

1487年3月13日付の教皇の返書を Bosio は次のように説明している。

> ［教皇は］その件では十分熱心に努めており，総長の書簡を受け取った後さらに危

23）ジェムが囚われていたのはフランス王領ではなく，あくまで修道会の領であり，また修道会は教皇のみに従属する建前であるが，当時のフランス王はオーヴェルニュ管区を含む地域においても強大な力となりつつあり，現実問題として教皇，修道会は王の権力を無視出来なかったと考えるべきであろう。

24）『修道会史』p.411の1488年の条で，あたかも1488年に初めて合意が成立したかの如く記している。

25）これらの謎には Thuasne も全く触れていない。

26）オスマン朝とマムルーク朝はほぼタルスス山脈で勢力圏を別ち，両者の関係は比較的穏やかであった。しかし緩衝地域であるラマダン君侯国，ドゥルカドゥル君侯国などへの宗主権争いが続いていた。1485年オスマン軍がアダナに侵攻し，翌1486年両国の全面戦争となった。

険が迫っているため益々熱心になっていると述べ，以下のように説明した。即ち教皇に対する反逆者どもの書簡が発見され，［それによれば］彼等は最大限の熱意と約束（instanza, e promesse grandissime）をもってスルターンをイタリアに呼び寄せている。［教皇にとって］あたかも家の中に戦争と悪魔を抱えているごとき状態である，と。そして教皇は総長に，戦争に熟練しスルターンについて知識を持つ修道会士を彼に送るように求めた。それはこの暴虐者［バヤズィット2世］による［ヨーロッパへの］打撃への［反撃の］大いなる進展のために準備し協議出来る事柄をこの者たちに諮るためであった。（『修道会史』p. 405）

Thuasne に拠れば Buccolino なる者を首謀とする一党が，教皇領である Osimo（Ancona 西方）を奪い，これをバヤズィット2世に献じて逆にその地を安堵されようと企図していたという（ii-1 pp. 150—151）。上の引用文中の「反逆者ども」がブッコリーノらを指すのは間違いない。「最大限の熱意をもってスルターンをイタリアに呼び寄せている」とはバヤズィット2世へのオスィモ献呈の意図を言う。教皇は，オスマン朝の脅威が自領に迫ったことを憂慮し，対オスマン朝政策を立案するために修道会士の派遣を求めているのである。

自領で反乱が起こり，しかもその地がオスマン朝に献呈されようとしているとあっては，教皇によるヨーロッパ糾合など及びもつかない。教皇の力ではこの反乱の鎮圧だけで精一杯であったと思われる（ii-1 p. 156）。教皇の言うオスマン朝への「［反撃の］大いなる進展のために準備し協議出来る事柄」が実際に準備され協議されたかどうか Bosio は一切記録していない。しかしこの場合，記録の無いことが準備されなかった証拠と考えるのが妥当であろう。教皇は修道会側の訴えに全く応えられなかったのである。

ハンガリー王マチァーシュはジェムと対オスマン朝政策に強い関心を示した人物であった。彼は1483年にオスマン朝と5年間の休戦条約を結び，1488年にはさらに3年間延長している[27]。その一方でジェムの引き渡しを受ける努力を続けており，1488年6月10日王の使者がロードス島に到着した。使者の言葉は，

王はオスマン朝と決戦（guerra finita）をする決意であり，力，富，そして命をも注ぎ込む覚悟であり，トルコ人（Turchi）に対して最も鍛えられ訓練されている修道会が行動し助言を与えてくれるよう望んでいる。王はバヤズィット2世の有力家臣多数（molti principali Turchi, i quali erano con Baiazette）と秘かに通じてお

27） ii-3 p. 33。更新の月日は示されていない。

り，彼等はジェムがハンガリー領内そしてオスマン朝の国境に入ればジェムの側についてバヤズィットに反乱を起こすと約束している。(『修道会史』p. 406)

というものであった。前半ではハンガリー王のオスマン朝攻撃への並々ならぬ決意が表明されており，後半では王がバヤズィット2世の有力家臣と通じていると述べてジェムの引き渡しを求めている。バヤズィット2世の家臣に関する言葉はオスマン朝内部のジェム支持勢力を考える上で興味深いものである。その真偽はともかく，これは王のジェム獲得への熱意の大きさを示すものと受け取れよう。ハンガリー王はジェムを自軍に加えてオスマン朝に「決戦」を挑もうというのである。

これに対する修道会の決定を Bosico はこう記している。

修道会は，キリスト教徒共同体（la Christiana Republica）の利益のためにはこの勇敢にして果断なる王にジェムを与えるのが恐らくはより良いことだろうと知ってはいたが，教皇を不快にさせないためには（per non dispiacere al Papa）他に途がないので，ジェムをイタリアに行かせることにした。―中略―［ハンガリー王に］以下のように［意向に沿えない旨の］回答書をしたためた。(『修道会史』p. 406)

この時点で修道会が，対オスマン朝政策の上ではジェムをハンガリー王に引き渡す方が，先の合意に従って教皇に渡すより良策であると認識していたことが明瞭に示されている。しかし修道会は教皇のジェム要求を理由に王の求めを断ったのであった。ハンガリー王がオスマン朝との休戦条約を更新したのは修道会の回答書を受け取った後のことかも知れない。

1488年10月初めフランス王がジェムの教皇への引き渡しを認め[28]，11月10日ジェムはブルガヌフを発った。ローマに到着したのは1489年3月14日であった。

2．ジェムのローマ教皇監視下の時期

1489年バヤズィット2世は修道会に使者を送った。Bosio は使者の言葉を次のように記している。

約束の趣旨に反してジェムがフランスを出発してローマに連れて行かれ，スルターンは大いに驚いている。そしてそのローマでは多数のキリスト教徒君主，及びスルターンの敵マムルーク朝スルターンと共に[29]，ジェムを用いて（per mezo di

---

28）ii-1 p. 209。Thuasne の説を要約すれば，教皇がフランス王の敵 Maximilian への加担を止め，またフランス王領内での十分の一税徴収を断念したことが主な理由であった。

Zizimi）スルターンを苦しめ，悩ませるための様々の密謀がなされていると聞いている。これら耳に達する事柄が，ジェムはフランスにいることとするという，かって取り交わした約束に反しているので，総長の考えを聞くために使者を送った。教皇，他のキリスト教徒諸君主と共にこの事態が進行せぬよう努められたい。スルターンは［ジェム及び彼を巡る問題によって心乱されることなく］静かに暮らすこと（vivere quieto）を望んでいる。（『修道会史』pp. 413—414）

これに対して総長は次のように答えた。

ジェムのフランスからの出発は教皇の命令によるものである。教皇の意向に背くことは出来ない。スルターンはこれを妨げてはならない。ジェムは，ローマに着いた後直ちに有害なものから有益なものになった。なぜならジェムは，望めばいつでも独力で［スルターンに］大きな危害を加え得るフランス王から取り上げられ，自らは十分な軍事力を有しない教皇の下に入ったからである。—中略— 静かに暮らす真の途は艦隊をガリポリの外へ出さぬことである。それは，キリスト教徒諸君主に疑いを抱かせないためであり，仮にジェムがスルターンを攻撃しようとした時，彼等が団結してジェムを用いて（per mezo della Persona di Zizimi）この大きな好機を利用する事態に追い込まないためである。スルターンは自らの意向を伝えるために教皇に使者を送るべきである。そうすればスルターンに大いに役立つと［総長は］保証する。共通の利益のためにすべてが整うよう喜んで教皇との仲立ちをしよう。（『修道会史』p. 414）

バヤズィット2世は総長の約束違反を責めて釈明を求める一方，「ジェムを用いてスルターンを苦しめ，悩ませるための様々の密謀」が教皇を中心にマムルーク朝も加わって論じられていることを指摘して強い懸念を示している。対して総長は，ジェムをローマに移したことについて教皇の命に背けなかったと言い，かえってジェムが教皇の許にいるほうがスルターンには都合が良いと主張した。またバヤズィット2世の不安を逆手に取り，艦隊派遣を決意させまいと巧みに切り返している。そしてローマでの「密謀」を止めさせるために教皇に使者を送るよう勧めている。

しかし修道会はこの「密謀」が進行するよう巧みに時間稼ぎを行なった。「喜んで教

29）当時依然オスマン朝と交戦中のカーイト・バーイは教皇に使者を送り，ジェムが彼に引き渡されるためならば，十分な支援と共にキリスト教徒諸君主の同盟に加わると申し出ていた（『修道会史』p. 413）。

皇との仲立ちをしよう」と言いつつ，実際はバヤズィット2世の教皇への使者派遣のためのオスマン朝と修道会の準備交渉を長引かせたのである[30]。この準備交渉が決着したのはBosioに拠れば翌1490年3月頃であった（『修道会史』p. 414）。そしてこの3月25日，教皇は諸国の使節を前に，一致してオスマン朝を攻撃すべしと訴えたのである。

Thuasneに拠ればこの日は「お告げの祝日（fête de l'annocitation）」であり，教皇は礼拝のため各国の使節がローマに参集する機会を利用して対オスマン朝十字軍を呼び掛けたのであった。この時十字軍の構想はかなり具体的に話し合われた。例えば軍の構成は三軍（教皇とイタリア諸都市の費用によるもの，神聖ローマ帝国，ハンガリーなどの費用によるもの，フランス，スペインなどの費用によるもの）とし，出来れば総指揮官を置くべきものとされた。また各国の兵の参集地，出撃ルートも細かく議論された（ii-1 pp. 265—268）。

この対オスマン朝攻撃への動きの中で教皇と共に重要な役割を演じたのはハンガリー王であったと考えられる。『ジェム伝』には，ハンガリー王の使者が何度か教皇を訪れジェムを要求したと思われる記述があり，教皇はジェムに，

> あなたはハンガリーに行くのが良い。彼等はあなたを心から望んでいる。（『ジェム伝』p. 23）

と言っている。これだけでは教皇の意図は分からないが，次に示すジェムの返事で明らかになる。

> 今やあなたたちの考えによれば，私がハンガリーに行き，その兵隊と共にイスラームの人々（ahl-i Islām）に向かって［攻めて］行くことが必要だという。私がイスラームの人々に対してそのようにして行けば，彼の地のウラマーは私を不信心と断ずる。（『ジェム伝』p. 23）

教皇はジェムにハンガリーへ行ってそこからオスマン朝を攻撃せよと言ったのである。教皇とハンガリー王の間で何等かの合意が成っていたと見るのが自然であろう。ジェムと教皇のこの遣取が教皇の十字軍の呼び掛けの前後いずれかは，『ジェム伝』の記述からは判断出来ない。しかしいずれにしても，ジェムがローマに着いてからハンガリー王マチァーシュの没する1490年4月7日までに間違いない。オスマン朝攻撃への動きにおけるマチァーシュの働きの大きさを読み取ることが出来る。

30）準備交渉の引き延ばしはLefortの紹介する文書T.S.A.Y no. 64（i-4 pp. 103—106）によく表れている。

さて，3月25日の教皇の訴えによって具体化した十字軍計画は，計画の立案は成ったものの，不安を内包していたと考えられる。Thuasne が述べているところでは，この十字軍には教皇自らの出陣が望ましいとされ，キリスト教徒軍内部で対立が起こった時に備えるのがその主たる理由であった。また近隣の国同士現在の敵意を忘れて争いを静めるようにわざわざ互いに念を押さねばならない有様であった（ii-1 p.267）。フランス王が神聖ローマ帝国の Maximilian，イギリス王 James 4 世とそれぞれ対立し，教皇とナポリ王が再び不和になっていたことに象徴されるヨーロッパの結束の欠如が背景にあった。教皇の呼び掛けによる十字軍計画が作られたからと言って実行が約束された訳ではなかった。そして4月7日，この十字軍計画の中心的存在であったと思われるハンガリー王マチァーシュが急逝する。これによって計画は一挙に崩れ去ってしまった。ヨーロッパは曲形にも作り上げた十字軍計画を，彼等が結束力を欠いたが故に実現させることは出来なかったのである。

この後インノケンティウス8世はキリスト教徒諸君主の十字軍への情熱の新たな高まりを感じることなく1492年7月に没する。新教皇アレクサンデル6世もオスマン朝に対して為す術のないままであった。ヨーロッパは依然分裂と対立の状態にあり，それは一向に静まる様子を見せなかった。このような分裂状態の中でフランス王シャルル8世のイタリア遠征が始まったのである。同時にそれは「スルターン・ジェムの時代」におけるヨーロッパの，オスマン朝に対する最後の十字軍の試みであった。

3．シャルル8世と「スルターン・ジェムの時代」の終わり

シャルル8世の率いる軍は1494年夏イタリアへ向かって出発した[31]。一般にこの遠征はシャルル8世がナポリとミラノの争いに乗じて Charles d'Anjou（1227—1285）に始まるナポリ王位請求権を実現し，さらにイタリアをオスマン朝攻撃の基地にしようと思い立ったものとされている。ナポリ王位要求が遠征の主目的であったことは改めて論ずるまでもないだろう。一方オスマン朝攻撃計画はナポリ王国攻撃の口実に過ぎないと見られがちであるが果してそうか。

『修道会史』に拠ればシャルル8世は，対オスマン朝遠征の考えのあることを既に1492年教皇インノケンティウス8世に伝えている（『修道会史』p.417）。また総長の甥でオーヴェルニュ管区でのジェム監視責任者であった Guy de Blanchefort をオスマン朝の情報提供者として呼び寄せ，さらに総長自身がフランスに来るよう求める書簡

31） 1559年まで続くイタリア戦争の始まりとして知られる事件である。

（1492年6月26日付）を持たせてロードス島に送った（『修道会史』p. 417）。また王は，王自身がイタリアに向かってフランスを出る以前にも，対オスマン朝遠征に関する協議のために総長にローマで会おうと伝えており，教皇に総長を促すよう要請する書簡まで送ったという（『修道会史』p. 423）。イタリアに入ってからもミラノに近い Vigevano の町から重ねて総長に書簡を送っている。その中で王は，総長のオスマン朝に関する知識が彼の計画に大いに役立ち，指針を与えるものだと述べた後，

言い訳せずに，ローマで私に会うべく即刻出発されたい。（『修道会史』p. 423）

と求めている[32]。従ってこれらの事実からシャルル8世が実際にオスマン朝攻撃をイタリア遠征の目的に加えていたと考えなければならない[33]。シャルル8世のイタリア遠征は，王による対オスマン朝十字軍計画の第1段階をなしていたと言うべきである。

1494年暮シャルル8世は，教皇とその支持を受けているナポリ王Alfonso（在位1494—1495）が守るローマを包囲した。アルフォンソはその軍と共にナポリへ逃げ帰り，12月31日殆ど戦闘もないままシャルル8世はローマに入った（ii-1 p. 344）。彼はジェムの教皇からの奪取をローマ制圧の目的に加えていた。『ジェム伝』にはシャルル8世がローマに入った直後のこととして次のようにある。

教皇は塔[34]へ逃げた。フランス王は塔を包囲した。毎夜母方のおじ Monsieur de Brasse を［教皇への］使者に立て，「スルターン・ジェムを快く我々に与えよ。」と要求していた。（『ジェム伝』p. 29）

シャルル8世が決して一時の気まぐれでジェムを要求したのではないことがよく分かる。『修道会史』に，

［シャルル8世は］この異国の王子を連れていることがトルコ人に対して行おうと

32）しかし総長は終に要請に応えず，それは彼がフランス王の事業の失敗を見通していたからであると Bosio は言う（『修道会史』p. 424）。

33）シャルル8世はこの後イタリア南下の途中フィレンツェで，諸君主に対して声明を出している。その中で王は「オスマン朝スルターン（il Turco）に対して戦いを行なうという目的と決意のために，まずナポリ王国を取り返すことが私には好都合である。」（『修道会史』p. 423）と言っている。これは王がオスマン朝攻撃計画をナポリ遠征の口実に使っている証拠とも解釈出来る。しかし王が以前からオスマン朝の情報を修道会から得ようとしていたことを考えれば，そのような解釈は成り立たないと言わねばならない。

34）San Pietro 寺院の東に位置する Castel Sant' Angelo を指す。

している戦いに極めて重要であると判断していた。(『修道会史』p. 424)
とあるのもこれを裏付けるものとなろう。

1495年1月28日ジェムはシャルル8世に引き渡された。これは王のイタリア遠征の目的であるオスマン朝攻撃の重要な準備が整ったことを意味する。この後はナポリ王を破ってその王位を奪い，諸君主を糾合して東方へ乗り出す手筈であった。1月29日シャルル8世はジェムを従わせてナポリへと出発したのであった。しかし行軍の途中2月17日ジェムの体調に異変が生じ，ナポリに入って数日を経た2月25日未明，ジェムは息を引き取る[35]。

シャルル8世は易々と南下を果したもののナポリ王国の統治に失敗し，オスマン朝攻撃のための諸君主の糾合もならないままに1495年の内にフランスへ引き上げる。対オスマン朝十字軍を実現させることは出来なかった。王は「スルターン・ジェムの時代」の終わりをその目で見届けたのみであった。そしてヨーロッパはジェムを失ったのである。

主として『修道会史』によりながら「スルターン・ジェムの時代」のヨーロッパが対オスマン朝政策を巡っていかなる動きを示したかを見てきた。それはヨーロッパが自らの対立と混乱の故に結束することが出来ず，ジェムの存在によって与えられたオスマン朝攻撃の好機を失う過程であったと言えよう。そのことは同時に，オスマン朝に対抗していく実力の無いことをヨーロッパが自ら明らかにしたことを意味しているのである。

おわりに

冒頭で設定した課題の解明のため，まず主として『ジェム伝』によりながらジェムの後半生を概観し，次にジェムがヨーロッパに身を置くことによってオスマン朝とヨーロッパの関係史における新しい時代が現れたことを述べ，ヨーロッパがオスマン朝攻撃の好機を得たこの時代を「スルターン・ジェムの時代」と名付けた。その上でこの「スルターン・ジェムの時代」のヨーロッパの状況の分析を具体的に行ない，その結果，ヨーロッパは自らの対立と混乱の故に結束してオスマン朝を攻撃することが出来ず，ジェムの存在によって与えられた好機を失ってしまったことが分かった。「スルターン・ジェムの時代」は，ヨーロッパがオスマン朝に対抗してゆく実力を持たないことを自ら明白にした時代であったと言える。

この後ヨーロッパは，オスマン朝がバヤズィット2世の治世後期，Selim 1世，Süleyman 1世の時代を通じてさらに版図を拡大し，地中海を内海化して，スレイマン

---

35) 死因は様々に言われる（ii-1 pp. 364—375）が，病死説と教皇アレクサンデル6世による毒殺説に大別される。

1世の下で極盛期を迎えることを許してしまう。16世紀のオスマン朝の繁栄は決して偶然の所産ではない。ヨーロッパが，先立つ「スルターン・ジェムの時代」にオスマン朝に対抗する実力の無いことを明白にし，オスマン朝にその勢いを保たしめたことが重要な要因と言わねばならない。「スルターン・ジェムの時代」はオスマン朝とヨーロッパの歴史の中でこのような意味を持つ時代であった。

参考文献

i

1. *Wāqi'āt-i Sulṭān Jam*, ed. by Mehmet Arif, *Tarih-i Osmanî Encümeni Mecumuası*, ilâve, İstanbul 1330A. H.
2. Khwāja Sa'ad al-Dīn, *Tāj al-Tawārīkh*, 2vols., İstanbul 1279A. H.
   (ジェムに関する部分のフランス語訳がある。"Aventures du Prince Gem, traduites du turc de Saad-eddin-efendi", par Garcin de Tassy, *JA* (1826), pp. 153-174)
3. Iacomo Bosio, *Dell'Istoria della Sacra Religione et Illustrissima Militia di San Giovanni Gierosolimitano*, Parte Seconda, Roma 1594
4. *Documents grecs dans les Archives de Topkapı Sarayı*, ed. by Jacques Lefort, Ankara 1981
5. Donado da Lezze, *Historia Turchesca 1300-1514*, ed. by I. Ursu, Bucureşti 1909
6. *Secrets d'Etat de Venise*, ed. by Vladimir Lamansky, Saint-Pétersbourg 1884
7. *Zizim*, Les Archives du Ministère des Affaires étrangères de France 所蔵文書, Tome 2, Document 21, Renvoi ff. 94-151
8. İ. H. Danişmend, "Vakıât'a nisbetle Gurbetnâme", *Fatih ve İstanbul*, II (1954), pp. 211-271

ii

1. L. Thuasne, *Djem Sultan*, Paris 1892
2. İ. H. Ertaylan, *Sultan Cem*, İstanbul 1951
3. S. N. Fisher, *The Foreign Relations of Turkey 1481-1512*, IIIinois 1948
4. E. Brockman, *The Two Sieges of Rhodes 1480-1522*, London 1969
5. Turhan Tan, *Cem Sultan*, İstanbul 1948
6. Ahmet Refik, *Sulṭān Jam*, İstanbul 1923
7. S. Tansel, *Sultan II. Bâyezît'in Siyasî Hayatı*, İstanbul 1966
8. Dorothy M. Vaugham, *Europe and the Turk—A Pattern of Alliances 1350-1700*, Liverpool 1954

9. Cavid Baysun, *Cem Sultan, hayatı ve şiirleri*, İstanbul 1946

iii

1. Cavid Baysun, "Cem", *İslam Ansiklopedisi*, III, pp. 69—81
2. Halil İnalcik, "Djem", *EI²*, II, pp. 529—531
3. S. N. Fisher, "Civil Strife in the Ottoman Empire 1481—1503", *The Journal of Modern History*, XIII (1941) , pp. 449—466
4. Sehabeddin Tekindağ, "Bayezid II.'in Tahta Çıkısı Sırasında İstanbul'da Vukua gelen Hadiseler üzerine Notlar", *Tarih Dergisi*, 14 (1959), pp. 85—96
5. İ. H. Uzunçarşılı "Cem Sultan'a dair beş orijinal Vesika", *Belleten*, XXIV (1960), pp. 457—483
6. İ. H. Uzunçarşılı "Fâtih Sultan Mehmed'in Vefatı üzerine Vezir İshak Paşa'nın İkinci Bayazid'i Saltanata Daveti Arizası", *Belleten*, XXV (1961) pp. 74—77
7. Şerafettin Turan, "Barak Reis'in Şehzade Cem Mes'elesiyle İlgili olarak Savoie'ya Gönderilmesi", *Belleten*, XXVI (1962), pp. 539—555
8. S. Tansel, "Yeni Vesikalar karşısında Sultan İkinci Bayezit hakkında bazı Mütalâalar", *Belleten*, XXVII (1963), pp. 185—236
9. V. L. Ménage, "The Mission of an Ottoman Secret Agent in France in 1486", *JRAS* (1965), pp. 112—132
10. S. Eyice, "Sultan Cem'in Portreleri hakkında", *Belleten*, XXXVII (1973), pp. 1—49
11. R. Boudard,"Le Sultan Zizim vu à travers les Témoignages de quelques Ecrivains et Artistes italiens de la Renaissance", *Turcica*, VII (1975), pp. 135—156
12. Ettore Rossi, "The Hospitallers at Rhodes, 1421—1523", *A History of the Crusades*, III (ed. by Harry W. Hazard), Madison (Wisconsin) 1975
13. Francesco Cognasso, "Il Sultano Djem alla Corte di Alessandro VI", *Popoli*, II (1942), pp. 96-103
14. P. Giordani,"Un Ostaggio turco alla Corte d'Innocenzo VIII", *Rivista d'Italia*, 1907, p. 638 sqq.